

月刊 Hanada 掲載 — 文科省「統一教会陳述書」捏造疑惑の全貌

要点

- 月刊『Hanada』2025年4月号で福田ますみ氏が文科省による陳述書捏造疑惑をスクープ
- 福本修也弁護士が「文部科学省の虚偽証拠捏造行為に関する報告書」（PDF15枚）を公表
- Bitter Winter が本件を国際的に報道、海外でも司法手続きの公正性に疑問の声
- 主要保守誌が取り上げたことで、大手メディアが報じない論点に光

月刊『Hanada』2025年4月号（2月27日発売）に、ノンフィクションライター福田ますみ氏による「文科省の犯罪『統一教会陳述書』捏造の全貌」と題するスクープ記事が掲載された。旧統一教会（現・世界平和統一家庭連合）の解散命令請求をめぐり、文部科学省が裁判所に提出した被害者陳述書に捏造の疑いがあると指摘する内容である。

反対尋問で浮上した矛盾

福田氏の報告によれば、反対尋問の場で元信者2名が、自身の陳述書に「記憶にない内容」が含まれていたと証言した。また、ある現役信者は、文科省職員が目的を説明せず体験を聞き取り、「組織の解散を心から望む」と結ぶ陳述書を作成したと述べたが、本人はそのような意思を示していないと主張している。非公開審理の下で、こうした問題が外部の目に触れにくい構造も指摘されている。

弁護士報告書と国際報道

家庭連合側の福本修也弁護士は「文部科学省の虚偽証拠捏造行為に関する報告書」（PDF全15枚）を公表し、組織的な証拠作成過程の問題点を詳述した。宗教の自由を専門とする国際誌 Bitter Winter も本件を取り上げ、司法手続きの適正性に疑問を呈している。2025年3月には浜田聡参議院議員が総務委員会で「証拠の捏造・改ざん」に言及しており、国会でも議論の対象となった。

保守誌報道の意義

大手メディアが解散命令請求の経緯を詳報しない中、主要保守誌が本件を特集した事実は、多角的な報道の重要性を示している。今後、司法の場で陳述書の信用性がどのように判断されるかが焦点となる。